
ようこそ、上条家へ

忍野八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ、上条家へ

【Nコード】

N3368BA

【作者名】

忍野八雲

【あらすじ】

上条家のありそなお話。

ピンポン。ある昼下がり。

とある学生寮に住まいを置くツンツン頭がトレードマークの平々凡々な男子高校生・上条当麻は家の呼び鈴が鳴るのを耳に入れた。

今日は最近続く世界を舞台としたデモ行進やらなんやらで、ここ学園都市も影響を多少受けているそうで、その影響か彼の学校も先生の出張などもあり、学校も当然早めに終わったわけである。

そのため、家では空腹のため餓えたというのは大げさだが肉食獣ばりの目をした空腹シスターに出迎えられ、

「ちょっと、インデックスさん？今すぐ支度するから待っていてくれませぬか？……だから、その歯剥き出し噛みつき臨戦態勢をどうか解ギャー！？」

というところに、この呼び鈴である。上条はこの呼び鈴がどつかの悪徳神父だろうが堕天使エロメイドだろうが構わないというヤケになった状態で、空腹シスターことインデックスを退け勢いよく扉を開けた。

そこには、同じ高校の同級生青髪ピアスが立っていた。……いや、それだけじゃなく後ろにはデコ巨乳で仕切り屋・吹寄制理、最近までは巫女の格好をしていた転校生・姫神秋沙、そして普段は金髪グラサンの見た目ちよい悪風の高校生だがその本質は世界をまたにかけた多重スパイらしい・土御門元春が立っていた。

「あの、何の用でせうか？正直クールダウンした上条さんの頭から
でる答えは君らを部屋に入れてはならないと告げていますことよ？
ということ、また明日学校でエ……」

と、ゆっくりドアを閉めようとするが、青髪ピアスはしつこいセー
ルスマンよろしく足を入れてきた。

そして、扉の間からキラリと土御門のグラサンが覗く。

「にゃー、残念ながらそうはいかないぜよ」

「かまへんやろ、カミヤん。別に悪いことせえへんから」

「お前ら、単に暇すぎてウチに来ただろ……。言っとくが楽しめる
ものなんて何もないからな」

と、言いつつ諦めた上条は家からゆっくりと出てドアを閉める。そ
こへ、吹寄が聞いてもないのに口を出してきた。

「言っておくが、私は貴様の部屋を見に來ただけだ。どうせ、墮落
した学校生活を送っている貴様の部屋も同じように墮落していると
思ったからな」

その後ろには、新品の掃除セットがある。大方通販商品の実験とい
うところだろう、と上条は大きなため息をつく。

「んで、姫神は何でうちに？」

「来ちゃいけないわけ？なら。帰る」

一瞬にして気まずいオーラを出す姫神に、上条はとりあえずフォロ

ーを入れる。

「いや、そういう意味じゃなくて、姫神も暇なのかってことだよ」

「うん。暇。だから。その二人の話を聞いてついできた」

「……なるほど」

上条はおそらく目をそらしているだろう二人に視線を合わせようと
しつづ言った。

「まあ、いいや。入れよ、食べ物はあるか？ウチにはほとんど……
ハッ！！」

上条はここで大きな事実気付いた。そこで一気に土御門の首根っ
こをつかむと内緒話モードに突入する。

（おい、土御門！！ウチにはインデックスがいるんだぞ？姫神はい
いとして、ほかの二人は少なくとも一緒に住んではいることは知らない
だろ！？）

そついいながら、上条は自身の頭の中で自分が吹寄に正座で説教を
受けつつ学校ではネチネチと青髪ピアスに弄られる、といった地獄
絵図を思い浮かべる。

（そーいえばそーだったニヤー）

（なあ、棒読みだぞ？コラ）

上条は握り拳を土御門に見せつける。

（わ、わかったニャー。ていうか、別にカミヤン家に遊びに来た設定で何とかなるんじゃない？）

（上条さんが知る限りでは、あいつが二人にバレないように行動するなんて器用な真似は象が踏みつぶしたアリの数を数えるくらい無理な話だ、と思っているのですがどうでせう？）

（にゃー、激しく同意できるかもしれないぜよ）

（てなわけで、テメエの家がそれ以外の場所でいいから、あいつらに怪しく思われないうちにうまくやれ！！）

（はいはい、わかったぜよ）

「貴様ら、何こそそしているんだ？いい加減貴様の家に入りたいんだが」

ビクツツ！！と体を震わせてしまう二人に対し、吹寄は掃除セットを早く試したいのかウズウズを隠しきれないでいる。

「あ、あのよ。今家がどーしてもみせられる状況じゃなくてさ。なんとというか、なア土御門」

「な、なぜここで押し付けるかにゃー！？ああ、ええつと要はあれぜよ。男の部屋と化しているというか女子には無論見せられないみたいな感じだにゃー」

最初は慌てていたが、さすが多重スパイ。一気に落ち着いてうまく舌をまわし始めた、が。

「上条当麻、貴様まさか部屋中に」

「ちょ、ちょっと待て吹寄！！別に如何わしい本とか深夜こっそり見るようなビデオとかはないから！！」

上条が口を開くたびに女子二人は一步步下がっていき、さらにはゴミを見るかのような目つきに変わっていく。

「不潔」

「ちょっとまって、ホントマジで今の言葉は健全男子高校生の上条さんにはかなりのダメージが！！いや、マジでそういうのはないから、な。信じてくれって」

「最低」

もう一度だけ蔑みを含めた口調で言つと、彼女たちはそのまま帰って行つた。その光景を見て、

「ああ、不幸だ…」

と、上条は頭垂れた。

「ま、まあしょうがないにやー。なんとか明日皆に言えば大丈夫ぜよ」

「せやせやカミヤん。元気だし？」

「お前らに励まされてもなア……」

というわけで、残りの青髪ピアスは暇さえなんとかできればいいということで、土御門の部屋に入って行った
そこでは上条の反省会やバニーやメイドについて何時間も語った。
上条の涙と共に。

もちろん、

上条の脳内には、そろそろ噛み付きMAX状態の空腹シスターが部屋で待機していることなど微塵も残っていなかった。
それから、あの四人が上条宅の呼び鈴を鳴らしてから4時間後に、いつもより大きめの悲鳴が学生寮中に響いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368ba/>

ようこそ、上条家へ

2012年1月8日19時50分発行